

## 地球環境研究センター ニュース

CGER : Center for Global Environmental Research

&lt;通巻第5号&gt;

vol. 1 No. 5

- 目次■ ●アジア太平洋地域における地球温暖化問題に関する研究ワークショップ開催  
●「地球環境研究者交流会議におもう」 - 市川 惇信 -  
●M. & D. B. ツーヌ第5回「地球環境モニタリング Q & A (Q1~2)」

## アジア太平洋地域における地球温暖化 問題に関する研究ワークショップ 開催

### THE ASIAN AND PACIFIC WORKSHOP ON GLOBAL WARMING RESEARCH

- Date : March 18 (Mon) ~ March 20 (Wed) 1991  
Place : Center for Global Environmental Research  
Participants : INDIA, INDONESIA, KOREA, THAILAND, CHINA, BANGLADESH  
( 9 participants from 6 countries )  
Address : Center for Global Environmental Research  
National Institute for Environmental Study  
Environment Agency  
16-2, Onogawa, Tsukuba Ibaraki, 305 JAPAN  
Tel : 81-298-51-6111 ext. 374, 383  
Fax : 81-298-58-2645
- Programme : First day ( March 18 )  
(draft Opening Address  
outline) Introduction  
Country Report
- Second day ( March 19 )  
Report on Japan's Program for Global Warming Research  
Discussion
- Third day ( March 20 )  
Discussion on Concluding Summary  
Closing Address

同ワークショップは、平成2年度地球環境研究総合推進費における課題検討調査研究「アジア太平洋地域における総合的地球温暖化対策に関する予備的研究」の一環として実施し、平成3年度以降着手することを考えている「アジア・太平洋地域における総合的地球温暖化対策に関する研究計画」の立案を図ることを目的として開催するものである。また同ワークショップは、「地球温暖化防止行動計画（昨年10月閣議決定）」や本年1月末に名古屋で開催された「地球温暖化アジア太平洋地域セミナー」のフォローアップとして実施するものでもある。

環境庁 国立環境研究所 地球環境研究センター 1991年2月

---

# 地球環境研究者交流会議におもろ

地球環境研究センター長、国立環境研究所副所長 市川 惇信

---

## 1 会議への期待

地球環境研究者交流会議（以下「交流会議」）の開会に際しても申し上げたことの繰り返しになるが、地球環境研究は「分散型巨大科学」である。研究機関・組織を超え、国を超え、学問領域を超えて分散し、膨大な資源投入を必要とする巨大な研究領域である。加えて、研究すべき課題のほとんどがまだ見えてきていない地球環境研究においては、研究者一人一人の発想と英知を最大限に尊重し、全体として地球環境問題の解明、影響評価、対策に向けて、分散している研究を方向付していくことが重要である。すなわち、研究者は自律して、互いに研究の計画・実施・成果についての情報を交換し、問題を発見し、それに挑戦することにより、はじめて所期の成果が達成できる。このような研究領域を「自律分散型巨大科学」ということにしよう。交流会議は、自律分散型巨大科学である地球環境研究において、「協調の場」の役割を果たすためのものであった。

## 2 会議の状況

初の交流会議に300名という研究者がお集まり頂けた。お忙しい中をご参加頂き、講演に討論にご参画頂いた方々に深くお礼申し上げたい。一方、このことは、うぬぼれの批判をを恐れずにいえば、上記の期待と目的が時宜を得たものであったことを示していたといえる。意図においては成功であった。会議の実態がこの意図に込めかどうか。

地球環境研究等総合推進費の配分が大幅に遅れたこともあって、情報交換は研究計画の紹介に留まらざるを得なかった。12月20日午前中に行われた地球環境研究連絡会議で調整された研究計画を、「オゾン層」「地球温暖化現象解明」「地球温暖化影響評価・対策」「酸性雨」「海洋汚染」「野生生物」「熱帯林」「総合化」の各分野について報告して頂いた。このレベルでの情報交換は、最も高いレベル

での情報交換というべきで、それなりに意味があったと思われる。時間不足で十分な討論ができなかったことが惜しまれる。

パネル討論会「今後の地球環境研究はどうあるべきか」は、それぞれの分野でリーダーシップをとってこられた方々のご意見の場の中で、研究者が自らのポジショニングを行なうためのものであった。9人のパネルメンバーのどなたもが、モニタリング、データベース、モデル、国際協力、学際研究、局所と大局、というキーワードに触れられておられたのが印象的であった。「自律分散型巨大科学」において重要なものが明らかになったといえよう。

## 3 問題点

高いレベルでの情報交換に基づく自らの位置同定は、それなりに意味があったといえよう。しかし一方で、それでは誰でもが知っている「当たり前」以上を出ない、という見方もある。当たり前ではない本当に新しい課題を協調の場の中で掘り出し、共同研究に課題として同定するためには、それぞれの学問分野の深いレベルにわたる情報交換が必要である。これを行うためには、2つの解くべき問題がある。一つは、深いレベルで議論するための共通言語をどう構築するかという問題である。他の一つは、議論の場をどう編成するかという問題である。今後の交流会議を計画推進するに当たっての大きな課題である。この課題は、地球環境に留まらず、自律分散型巨大科学推進の方策を見いだすための挑戦的課題でもある。

今回の交流会議にご参加ご協力頂いた方々に深く感謝申し上げますと共に、会議の設営運営に不行届きの多かったことをお詫び致します。次回以降、上記の課題への挑戦を含めて、よりよき交流会議に向けて努力します。一層のご支援ご協力をお願い申し上げます次第です。

昨年秋に地球環境研究センターが発足して既に5ヶ月が過ぎようとしている。世界情勢は現在、湾岸戦争で大きく揺れ動いている。この激動の20世紀末を切り抜けるため、我々はいかなる行動をとらなければならないのか。「地球環境モニタリング」は、その方向を指し示す一助となりうるか。この地球環境研究センターの業務3本柱のひとつ「地球環境モニタリング」に対して、誰もが抱く素朴な疑問に、当センター研究管理官がズバリ答える。題して…

## 地球環境モニタリング Q & A

(Q1~2)

地球環境研究センター 研究管理官

井上 元

Q1. 地球環境モニタリングは何を目的として行われるのですか？

A / 地球環境の監視および地球環境変動因子の解明のために、長期にわたり地球環境のモニタリングを行う事が主要な任務です。その結果は地球環境研究および地球環境保全のための施策に利用されます。

Q2. 気象庁は気象についてのモニタリングを行っているわけですが、地球環境モニタリングもそのイメージなのでしょう？

A / 気象庁のモニタリングは多くの分野の人々が期待している気象予報業務を行うためのものであるといえます。

地球環境研究センターのモニタリングは、人類の生存に係わる地球環境の現状把握と将来予測を目的にしているものであるといえます。また、地球環境モニタリングの予測のスケールは数十年以上であり、天気予報と違って日々予報を出すものではありません。従って、当面は地球環境研究の成果への寄与などを通じて行政の地球環境施策や一般の理解につなげていくこととなります。

気象観測はもともと自然災害予防の目的で始まったものであり、欠測が大きな災害に結び付いた過去の事例などの教訓から、欠測の無いようにするために極めて大きな努力を払っています。地球環境モニタリングは欠測をなくするように努力することは当然ですが、地球環境研究の目的にかなうような測定地点の選択とか精度の確保などの別な方面に、より重点を置くこととなります。

長期・継続的に観測を行うという点では共通することが多いのですが、気象観測と大きく異なる点もたくさん有ると言えます。

地球環境研究センター活動報告

1991. 1. 31 第1回 発生源モニタリング分科会 開催  
    <分科会出席委員> 鶴田治雄、陽 捷行（農業環境技術研究所）
2. 1 第1回 生物モニタリング連絡会議 開催  
    <分科会出席委員> 安野正之（国立環境研究所） 他
- 4 第1回 成層圏モニタリング連絡会議 開催  
    <分科会出席委員> 岩坂泰信（名古屋大学太陽地球科学研究所 教授）
- 13 第1回 航空機モニタリング分科会 開催  
    <分科会出席委員> 小川利紘（東京大学理学部地球物理施設 教授）
- 16 第1回 外洋モニタリング検討会 開催  
    <検討会出席委員> 秋元 肇（国立環境研究所） 他

編集後記

「地球環境研究センターニュース」第5号をお届けします。M.&D.B.シリーズ「地球環境モニタリングQ&A」は、今後しばらくシリーズでお送りする予定です。

また今月も、別紙でセンターニュース送付の希望調査を行っております。先月号で希望した方については、改めて希望する必要はありません。

この「地球環境研究センターニュース」は原則的に月1回のペースで発刊していく予定です。定期的な名簿の更新以外にも、随時送付希望を受け付けておりますので、下記までお問い合わせ下さい。

【お知らせ】

地球環境研究センターニュース原稿募集について

当ニュースも本号で創刊以来5号目を数えることとなり、今後一層内容の充実を図っていかうと考えております。その一環といたしまして、読者の皆様による「地球環境問題、地球環境研究」等についてのご意見をお寄せいただき、広くアピールすることにより、地球環境全般に対して貢献していけたらと考えております。ついでには、将来ニュースのなかに読者の広場的なコーナーを設け、そこに皆様のご意見を掲載していきたいと思っております。

原稿は最大でも1,200字程度にまとめて、下記宛てまで。また、匿名、ペンネームによる投稿の場合は、その旨ははっきりとお書きください。

編集・発行 環境庁 国立環境研究所  
地球環境研究センター  
連絡先 観測係（大橋）

〒305 茨城県つくば市小野川16-2  
TEL. 0298-51-6111 EXT. 374  
FAX. 0298-58-2645

このニュースは、再生紙を利用しています。